

闡光録

三、人間

釈尊は偉大な人間である。親鸞聖人も偉大な人格であった。人間の成就、人格の完成、それをぬきにしては仏の道はない。

人間は、人間を成就することを忘れる。人間を成就することを忘れた時、その時、人間はいなくなる。人間のいないところに人間の尊重も、光も、においも、道もなくなってしまう。

人間の道よりも、事業を重んじ、地位を、財産を尊ぶ時、そこには、道ならぬ策略や、権謀やペテンが必ず行われている。

人間が集まった時、人間がいけないほど淋しいことはない。

人間がいけないで、布教使がおり、学者がおり、お家柄がおり、検事がおり、校長がおり、金持がおり、貧乏人が歩んでおる。

生まれた時は、何も持つて生まれたのではなかった。

釈尊は、「国と財と位」とを捨てた。捨ててやがて人間道を成就された。

聖人は俗を出で、やがて僧を捨てて非僧非俗の天地に更生して、黒衣の愚禿となられた。聖人は、人間を成就しようとの願を持たない俗流にとどまることはできなかった。だが、俗よりもあさましい装われたる無生命の化城に、聖者を気取るには、あまりに内にそれを裏切るものを見出してしまった。そこに、人間道を歩まれた聖人がある。しかし聖人が黒衣に更生されたとして、黒衣を着ているのみでは人間ではない。

裸形外道と偽善者は、ともに仏を見失った者である。

私が僧侶でなくて、衣を着ていないことが、今日までの大問題であった。そして今でもそれが問題とされる。

「住岡はお坊さんでない。御開山も衣を着られたのだから、法を説くなら、お坊さんになってすればよいのに。」

その声はやがて非難となり、攻撃となり、異安心だときえ言われるもとなる。そうしたことが、私の歩み方を困難にした。それでも私は決して僧侶になっておけばよかったとは思わない。

慶沢和尚は「光明団についてゆくには、値打ちを下げねばついて行かれぬ。」という。光明団の前講などすれば、値打ちが下がると忠告する者があるからである。まこと、和尚の地方ではそうである。だから光明団だといわれることは、社会的に誇られ

ることではなくて、卑しめられ、蔑まれることである。眞実性よりも、肩書がものを言う。「光明団でなくてはいけないと思います、顔がよごれる。」だから、顔を捨てた人、よごれるような顔を持たぬ人のみが、集まってくれるのだ。したがって一種の「水ごし」を通らねば、低い門をくぐらねば、私ときようだいにはなれない。同胞きょうだいになった人は何も持たない純粹な人である。人数は少なくとも純粹な人である。そこに人間の集まった、明るいうれしい天地が開ける。光明団についてくる者のみが人間だと言っているのではない。また光明団と今歩みを一緒にしている人はすべて人間だと言っているのではない。

何々博士の弟子、何々和上の高弟と言え、その事がすぐその人のヒレになる。肩書になる。しかし私のように何も無い人間のもとに参することは、この地方では、確かに値打ちを下げることである。社会的な何ものも与えられない処に来るには、それ以外のものを求める人でなければ来られはしない。

私はいつも、団の中堅隊の方々に合掌せずにはいられない。どの先生も、私よりは、学も人格も信仰も深い方々である。

僧において僧を出で、衣も着ていて衣をぬぎ、院主であるよりもまず人である。人でなくしてどうして合掌してみ法が聞かれよう。この先生方に限って、私に「衣を着て来い、そしたら聞いてやろう」と言つた方はない。

私たちの講習は、布教資格をつけるための講習ではなく、和上を製造するための学問でもなく、布教材料研究の会でもない。ただ人間を成就し、仏を生きるための聖会である。

だからわれらの集いは、善人よ来るなかれ、悪人よ来るなかれ、賢愚、男女、老若等を出で、第三の腹を持つて集まれ、文学士の賢も、小学卒業の無学も、それを持ちこまないで、第三天地によつて集まる時、何人集まっても一つである。われらの集会の特色がそこにあつた。無学悲しむに足らず、有学誇るに足らず。ただ南無阿弥陀仏のみ眞実である。

諸仏は同一法身より生ずるといふ。われらの同胞はただ同一南無阿弥陀仏より生まれる。

聖人は「ただ、念仏する。」と言われた。「唯」といふ天地、それはなかなか領解することのできない尊い世界である。ただ聞き、ただ行じ、ただ働き、ただ信じ、ただ求め、ただ愛し、ただ喜び、ただ尽くし、ただ学び……………それは一切の毒素、功利的な我を迫出した純なる態度である。

念仏することが極楽のかわりに地獄への道をたどろうと、聞法することが餓死への道をたどろうと、求道が十字架への道だらうと、信ぜずにはおれず、行ぜずにはおれず、求めずにはおれないところに「ただ念仏して」の浄土への大道がある。

さる寺院の机上に「光明」が二冊おいてあった。説教に來た布教使がそれを見ておった。そして言った。「これはいいことが書いてある。頂けないでしょうか。これだけあれば、だいぶん説教の種がある」と。

そこには、第一に布教使がおつて人間がおらず、ただ信じ、ただ聞き、ただ行ずるという、純正宗教は失われている。そしてこの人には、成長も發展もない。人間の目が最後まで育つ。

「教育者だといつても、おれも人間だ。まあそう責めないでくれ。」

それは自己弁護の声であり、ずるい考え方であり、人間という言葉の使い方が間違っている。人間は畜生ではない。禽獣ではない。だが、畜生のような心を凝視し、非人間的な煩惱を内に見出すところに人格がある。

自己弁護の声はそれ自身、非人格、人非人を暴露している。世には、弟の犯罪に責任を感じて大臣の重任を拝辞しようとせられる高潔なる方もある。この人にこそますます世の信頼は集まるであろう。

社会は、常に真に真人間を求めている。

学問は、頭を作る。しかし頭だけ太れば、福助ではあつても人間ではない。そして学校はしばしば人間を作らないで、力のない福助を作った。

生きておるものは心臓を持つ。血あり、涙あるところに、具体的な人生がある。しかし心臓だけでは人間ではない。頭のない心だけの人間は、信じられない。情のまにまに流れてゆく。

頭と心臓との一体一致、それが、生活の中でもまれると、腹ができる、首などつらなくてもいい人間ができる。

宗教を無視した学問、学問を無視した宗教、それが今、日本の社会をかきまぜている。

官立大学の教授や卒業生が、平気で病氣や金儲けを祈る宗教、いな迷信に走つてその教師となつたり、信者となつたりするような悲惨が生まれる。

天下の大文士の追弔会が、バクチになつて営まれるという悲惨が生まれる。

人間に卒業はない。社会も宇宙も卒業しない。

人間が卒業すると、その時から人間ではなくなる。永遠の現役から除外されて、予後備に編入されたものは、年は若くても老人である。

仏に生きることは、真実に人間を成就することである。人間を成就することよりほかに成仏の道はない。

釈尊は完全人であり、真人であった。人間の成就よりほかに、天上天下唯我独尊はない。尊とは、人格の徳の尊さであり、独とは、独立、独自の尊さである。自らの尊さを發揮し、自覚するのみならず、一切衆生の上に、この自覚を成就しようとし、一切衆生を尊重する。

この成仏の道は、人間が何になるよりも易いことであるから、易往であり、しかもあまりにも少ないがゆえに、無人である。易往而無人とは釈尊の悲涙である。

人間にのみ人間の喜びがある。人間が人間であることを廃業した刹那から、さびしさや、苦しきや、暗さが訪れる。しかもその中に陥れば陥るほど、人間を成就することを無意味と考えて、道から遠ざかる。その生活は難行道となる。人になる道こそ易行道である。念仏は易行道である。

住岡夜晃全集第 18 卷 初出 「光明」 第 16 卷（昭和 9 年）第 1 号～第 20 卷（昭和 13 年）第 11 号